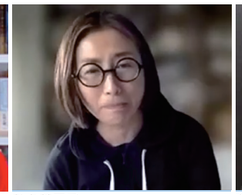
狩猟採集の集合住宅

—— 一人ひとりにとって何が必要かを問い，足元から見直す暮らし

第15回 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本壮介×池上一夫×布施谷成司

隈研吾氏.


乾久美子氏.

藤本壮介氏.

池上一夫氏.

布施谷成司氏.

第15回を迎える「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」は，長谷工コーポレーション創業70周年を記念して2007年にスタートしました．これまで建築を志す多くの学生に集合住宅にまつわる課題に取り組んでもらい，前回の第14回「集まって生きるかたち」では，集まって住むことの意味を改めて問い，価値観を刷新するような集合住宅の新しいかたちを提案してもらいました（応募数325点，登録数731件）．15回目となる今回は，前回に引き続き，総合地球環境学研究所所長（元京都大学総長）の山極壽一さんにゲスト審査委員として参加していただきます．開催に先立ち今回の課題や，今，集合住宅をどう考えるかなどを審査委員の方がたと，昨年まで審査委員を務めた長谷工コーポレーション代表取締役社長の池上氏に話し合っていただきました．なお，テーマ会議は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に配慮し，Web会議にて行いました．（編）

コロナ禍によって生まれた変化

——まず，前回のテーマはいかがでしたか．

隈　抽象的なテーマでしたが，具体的な提案まで落とし込まれたものが多かった印象です．新型コロナウイルスにより生活が脅かされる状況下で，その生活の基盤を改めて構築したいという切実さが感じられました．

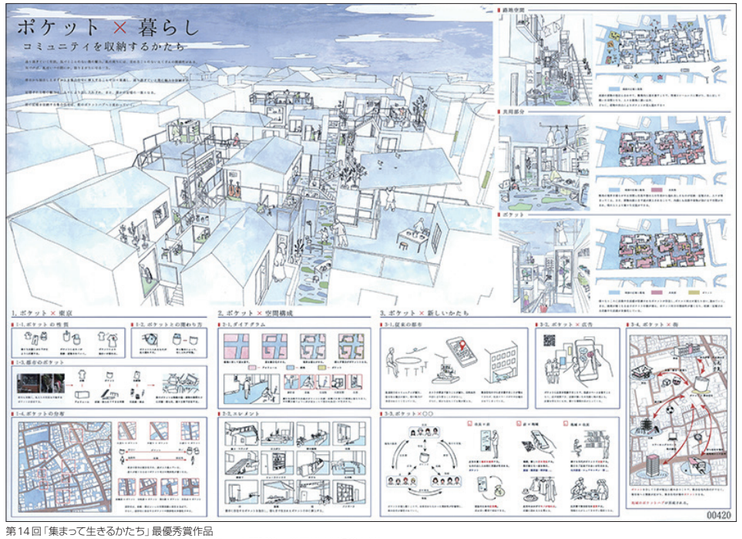
藤本　学生にとっては，学びや他者との交流に大きな制約が生じた中でのコンペとなったので，自分たちの生活の足元を見つめ直すよい機会になったのではないでしょうか．

布施谷　確かに，SNSといった身近なツールを活用したコミュニティなど，リアリティのある提案が多く見られました．そうした中でも，集合住宅という区分を飛び越えるような発想が新鮮で，目を引かれました．

乾　初めての試みとなったオンラインでのプレゼンテーション形式も，結果的によい時間だったと思います．集まって生きるという根源的なテーマに対してどのような解答を示したのか，提案のひとつひとつから深く汲み取ることができました．

池上　正直なところ，この1年間で社会のデジタル化が急加速し，リアルとヴァーチャルの境界があいまいになっていく中，デジタル技術を駆使した提案ばかりになってしまうのではないかと危惧していました．しかし実際には，リアルでしか得られない，暮らしの本質に立ち返ったような提案が多くて安心しました．

藤本　このコンペティションの特徴のひとつは，アイデア一発勝負ではなく，暮らしに寄り添った具体的な提案を求めていることです．その継続がこうした危機的な状況においては，本質として強調されたのだと思います．



第14回「集まって生きるかたち」最優秀賞作品
「ポケット×暮らし　コミュニティを収納するかたち」 小野誠治　齋藤惇（北海道大学）

ウイルスと共存する暮らしが続く中で

——昨年と変わらずコロナ禍が続いていますが，今回は，どのようなテーマが考えられるでしょうか．

隈　僕は昨年，海外に行かなくなり，自分で体のリズムをつくれるようになりました．海外に行っていると，知らず知らずのうちに他人のリズムに合わせていたことがよくなかった．そのように，コロナ禍により人それぞれ，暮らしに必要なものは何かが問われてきており，そうした社会からの要求が少しずつ見えてきた気がします．

池上　昨年4～5月のパンデミックが始まった時は，業界も混乱していました．内勤の社員はリモートワークや時差出勤などの対策が取れましたが，施工現場では人が集まらざるを得ません．そんな中，現場の各職方さんは意識高く緊張感を持って取り組んでくれていました．まだ右も左も分からない状況で，経験から学習し，対策を講じてきた様子を目の当たりにし，建築はリアルでしかできないと突きつけられ，ヴァーチャルの限界にも気づかされました．

布施谷　昨年より，半数の家庭で在宅勤務を経験していたというデータが示す一方，対面でのコミュニケーションの重要性も痛感しました．私も家族と食事をする時間が増えましたが，在宅勤務が増えることで，住宅の中にいかに優れた仕事環境を用意できるのかを考える機会にもなりました．昨年のマンション市場を見ても，郊外型のマンションが売れ始めているように，今までの都心偏重とは異なる住宅購入の動きが顕著になってきました．

藤本　コロナ禍が続き，昨年から同じように窮屈さが続いていますよね．今回のコンペでは，この窮屈さを打ち破るような，集合住宅のあり方を大きく前に進める提案が見たいですね．新型コロナウイルスの影響により，近代以降の機能主義による働き方，暮らし方の問題点が顕在化してきたと思います．これまでの生活の場は機能ごとに整理され，効率が追求されてきました．そうした機能主義と実際の生活とのズレが生む違和感は，コロナ以前から感じていたはずなのですが，人間は100年以上にもわたってそれなりに対応してきてしまった．しかし，コロナ禍により導入が進んだデジタル化で暮らしの可能性が広がり，多くの人が生活を見つめ直す機会となりました．今が暮らしの大きな転換点であることは確かでしょうね．

乾　昨年秋頃，不登校の子どもたちがオンライン授業には参加できるようになったというニュースがありました．いじめやスクールカーストから逃れて授業が受けられるようになったということで，コロナ禍だからこそ生まれた希望のひとつだったのかと思います．藤本さんがおっしゃった，機能主義の中に押し込めていた違和感が解消されたという象徴的な話かもしれません．

池上　これまで住居と職場の条件に合わせ，我慢しながら生活してきたのだと思います．建物価格，周辺環境，通勤距離など，人それぞれ多様であるべき暮らし方が，機能主義によって一律に整えられてしまっていた．そういう妥協した生活が今，見直されてきていると思います．

乾　去年と比較すると，新型コロナウイルスに対しての恐怖心もかなり個人差が見られるようになってきているように思います．立場によっても考え方が変わってきていて，今後はマネジメントする側・される側など，ウイルスとの付き合い方にも分断が生まれ，より複雑化するかもしれません．

隈　そうですね．どの情報を信じて行動すればよいのか分からない現状で，これからの生活の提案が見たい．これまでの集合住宅というものに捕捉されない思い切った提案が生まれるとよいですね．

たとえば暮らしの歴史を遡る

隈　この1年を通して，デジタル化に後押しされ，リアルなものがヴァーチャルに置き換えられることが増えました．一方，実際に見たり聞いたりすることでしか得られない，リアルの重要性も共有されるようになりました．このふたつの関係性も重要なテーマになるのではないでしょうか．

乾　リアルとヴァーチャルをどう混ぜ合わせていくのかという課題は，新型コロナウイルスに関係なく，いずれ直面していたと思います．今回のテーマが，そうした普遍的な問題提起に応答するきっかけになるとよいですね．

布施谷　世代によっては，ヴァーチャルだけの人間関係を求める人も現れ始めているようです．しかし，創造性を養う上では対面でのコミュニケーションはとても重要で，リアルへの欲求も増えると思います．

乾　対面でのコミュニケーションやディスタンスは，空間という共有の資源をどう管理し利用していこうかという課題と言えて，実はこれまで建築界で考えられてきたコモンズの考え方と類似点が多いように思います．最近では，コモンズの概念は一般社会においても潮流となっていて，さまざまなシェアの普及もその一端です．しかし，コモンズという言葉から新しいアイデアが出てくるか分かりません．今までとは何か違う価値を考えてほしいですね．

藤本　確かに，コモンズやシェアなどは建築界で取り上げられ続けているので，学生からすると真面目に，建築の言葉だけで返答してしまうかもしれないですね．私自身，昨年から移動する機会が減り，人間の活動の場が限定され凝り固まっていくような危機感を感じています．家にいなくてはいけない，オフィスで働いてはいけないと限定される窮屈さから抜け出し，さまざまな選択肢を状況に応じて選び取れるようにする．なるべく多様であり選択肢を増やすことが建築にはできるのではないでしょうか．

隈　僕は今，狩猟採集に興味があります．狩猟採集とは人類史において原初的な生活様式ですが，農耕的な場所との関係を見直し，食糧を求めて転々と移住するような生活を現代で想定してみると，これまでとは異なる社会構造や関係性が生まれるのではないでしょうか．狩猟採集を考えることで自身で生活のリズムをつくり，凝り固まりつつある現状を見直す提案が期待できるように思います．

藤本　人間の足元をしっかりと考え，人間社会の外から根源的なところにまで広がりそうです．

隈　デジタル化によりリアルとヴァーチャルの境界があいまいになったように，ここで考える狩猟採集にもリアルなものだけではなく，ヴァーチャルな関係も含まれるでしょうね．

池上　これまでとは違う価値観の住まいが生まれてくるような刺激的なテーマですね．ただ，テーマが広がりすぎて集合住宅自体の提案が希薄にならないよう，敷地の設定が重要だと思います．

乾　そうですね．歩いていて楽しい街並みがよさそうですが，歩き回るだけになるのも味気ない．交通機関が整っていて移動に対して多様な応答ができる，提案の切り口がいくつも設定できる条件がよいと思います．

池上　では，敷地は利便性が高く，周辺には住宅やオフィス，商業，学校，公園，神社などの機能や歴史的アイコンが混在したエリアにしましょう．敷地面積は1,000m^2，容積率は300%，戸数は50戸に設定します．ゲスト審査員ですが，前回の山極さんの批評も的確だったので，今回もお願いしたいと考えています．

藤本　昨年は山極さんが，それぞれの提案に建築という視点以上の，建築の外側からの示唆に富んだコメントで奥行と広がりを見せてくれました．

隈　難しく考えず，さまざまな角度からの自由な発想に期待します．

——それでは，第15回のテーマは「狩猟採集の集合住宅」に決定します．

（2021年5月26日，Web会議にて　文責：本誌編集部）

テーマについてゲスト審査委員の山極壽一さんからのコメント

人類は約1万2千年前に農耕・牧畜を始めるまで，700万年近く狩猟・採集生活を送ってきた．だから，私たちの心身にその暮らしは深く埋めこまれている．それを現代の狩猟採集民に探ってみると，移動生活，離合集散性，縄張り意識の欠如，徹底的な分配，平等性，権威の否定といった特徴が浮かび上がってくる．彼らは数十人の集団で定住せず，自然の恵みを求めて移動生活を送る．必要なもの以外は所有物を極端に減らし，誰もが何でもできるオールラウンドプレーヤーであるが，あえて人に頼んだり，自分で持っているのに他人のものを借りたりする．狩猟や採集で得たものはすべての仲間に行き渡るように分配するが，恩義を着せないために誰から分配されたかが分からない仕組みになっている．これは権威をつくらずに平等な関係を保とうとする彼らの社会のルールである．私は現代が「遊動の時代」で，この狩猟採集民の精神世界に近づくのではないかと思っている．インターネットはシェアの舞台であるし，ネットワークは権威をつくらない．移動生活が多くなり，物を持ち歩くよりも高度な配送システムによって現場調達を好む．物を所有するよりシェアや行為に価値を見出し，インスタグラムで共有する．そういった新しい生き方を住宅としてデザインしてほしいと思う．

山極壽一氏.